

残った写真とローン

光一さんの携帯電話の待ち受け画面は、2階建てのしゃれた建物。8年前、古里の福島県大熊町に建てたわが家だ。携帯のカメラで自宅を写したことを思い出し、保存ファイルから引っ張り出して壁紙にした。県営住宅に入居間もない4月半ばのことだった。

「やっぱりマイホームを持つのが夢だったから」。建て面積45坪の自宅は、震度6強の揺れにも耐えた。「今も写真のまんま。それだけに悔しさが込み上げてくるんだよ」
庭いじりが趣味だった幸さんも、家の花壇の写真を携帯に残していた。「今ごろはユキヤナギが満開なかしら」。仮住まいの県営住宅に庭は無い。「土いじりができれば、少しは気が紛れるのかも」と思う。
避難から2カ月。共働きだった夫婦は今

原発1キロからの避難
いつの日か

— 2 —

も仕事をしていない。郵便局員だった光一さんは愛知県豊田市の近くで同じ職場を探したが、まだ踏ん切りがつかない。住み慣れたわが家と見慣れた古里の景色が脳裏をかすめるからだ。貯蓄が生活費に消える日々が続く。

最近、原発から20*。圏内の一時帰宅のニュースが茶の間のテレビから流れた。「でも、私たちには関係ないんだ」と夫婦は顔を見合わせた。原発から1*。のわが家は、

放射能汚染の危険から一時帰宅さえ許されない。

夫婦に残されたのは携帯に保存された数枚の自宅の写真と27年分の住宅ローンだ。

福(はなわ)さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(43)、二女沙也加さん(14)は愛知県豊田市で暮らす。長女梨奈さん(18)は東京で大学生生活。